

特集 妊孕性温存

妊孕性温存療法(1) 卵子・胚の凍結

久慈 直昭¹⁾ / 吉田 梨恵²⁾ / 伊東 宏絵³⁾ / 井坂 恵一¹⁾

Summary

悪性腫瘍に罹患した女性の妊孕性温存法として卵子凍結や胚凍結を行う場合、限られた時間を使って患者に与える原病再発リスクを最小限にするため、レトロゾールの併用とランダムスタート法が卵巣刺激の際に試みられており、症例数は少ないが妊孕性ばかりでなく出生児の正常性、原病再発率についても卵巣刺激をしない群と遜色ない結果が得られている。一方、凍結後の離婚の際など倫理的に注意すべき点もあり、2016年6月に日本産科婦人科学会は新しい会告を掲載している。

Key words

卵子凍結
胚凍結
レトロゾール
ランダムスタート法

Naoaki Kuji, Rie Yoshida, Hiroe Ito, Keiichi Isaka
東京医科大学病院産科・婦人科、教授¹⁾、助教²⁾、
講師³⁾

はじめに

悪性腫瘍に罹患した女性の妊孕性温存法として、卵子凍結や胚凍結があることを知らない産科医はいない。しかし実際にこのような患者が卵子・胚凍結を希望して外来を訪れたとき、原病治療開始までの限られた時間でどのような方法があつてどのようなリスクがあるか、何が患者のために最善かを考え、「悪性腫瘍の予後・治療」と「妊孕性消失」という2つの重圧にさらされている患者や家族に伝えることはそれほどたやすいことではない。

本稿では、このような場合に知っておくべき事項について、卵巣刺激法の進歩と成果、および2016年6月に掲載された日本産科婦人科学会の会告を中心に読者ととも考えてみたい。

卵子採取から卵子・胚凍結の 技術的側面

卵子・胚凍結法はガラス化法の紹介により技術的にはほぼ安定してきたが、一方卵子採取法には、この10年ほどでいくつかの工夫が加えられている。

1. エストロゲン感受性腫瘍に対するレトロゾールの使用

レトロゾールはその作用機序から複数卵胞発育による高エストロゲン状態を回避できる可能性があり、特にエストロゲン感受性腫瘍患者の卵巣刺